

## 神奈川県生涯学習審議会（第13期）概要

## ○ 第1回審議会概要

	開催日	平成29年1月20日（金） 10:00～12:00
第1回 審議会	内 容	<p>○第13期生涯学習審議会会長・副会長の選出について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・会長に鈴木真理委員、副会長に小池茂子委員を選出した。</li> </ul> <p>○生涯学習審議会に対する神奈川県教育委員会からの諮問</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・神奈川県教育委員会から、「地域と学校の連携・協働の推進について」の諮問があり、これを今期のテーマとして調査審議を行うこととした。</li> <li>・事務局から、審議会の運営と、地域と学校の連携・協働に関する資料についての説明が行われた。</li> <li>・自己紹介を兼ねて、各委員が諮問内容に関する意見を述べた。</li> </ul>

## 【諮問内容「地域と学校の連携・協働の推進」に関する主な発言】

- 学校側の改善の問題、社会教育施設のあり方の問題、そして、それをつないでいる地域住民の方々のあり方、これらが上手く一体とならないと諮問テーマの解決策が見えてこないのではないかと思います。
- 基本的には、生涯学習は、学校のための役に立つための学びの場ではないと思っています。学んだ成果を活かさなければいけないと言われていますが、現実には、あるべき姿が先にあるのではなく、社会の中で築いてきた自分のキャリアを活かしたいと思う人たちの能力を、学校という場でどのようにしたら活かしていくことができるシステムをつくることのできるのかということを考えていく必要があると思います。
- 「連携」や「協働」となると、社会教育の良さや学校の良さを逆に潰してしまうことになったらもったいないので、学校教育は学校教育で、社会教育は社会教育でということが出来るかどうか。
- 社会教育の観点での見方をしていくことも重要ではないでしょうか。

## 【審議会の運営等に関する主な発言】

- 答申に重きが置かれ過ぎているので、ここで自由な意見の交換を行うことがより重要なことではないかと思います。答申の骨子ぐらいものを答申にするということもどこかで考えていくようにした方がよいと思います。

## ○ 第2回審議会概要

第2回 審議会	開催日	平成29年4月24日(月) 10:00~12:00
	内容	<p>○生涯学習審議会 第9期から第12期までの答申等の概要 第9~12期の報告又は答申の概要について、事務局より説明した。</p> <p>○地域と学校の連携・協働に関する取組事例について 委員2名より、それぞれ関わりのある事例について報告いただいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・厚木市森の里地区における学社融合の取組について</li> <li>・小田原市における放課後子ども教室の取組について</li> </ul>

以下、○発表者 ●発表者以外の委員

### 【取組事例についての主な発言】

#### (1) 厚木市森の里地区の学社融合

- 地域と学校の連携では、お互いが対等で主役になる WinWin のやり方にすれば継続できる。
- 協働事業をするために、地域の施設や団体等がゆるやかな連携（輪）を形成しようとしています。これは連携事業を行うことによって自然に形成されてきたものであり、時間がかかるものです。この輪があるからこそ、何かやろうとしたときにすぐに動ける体制があるのです。
- トップダウンの事業は、最初は活発に行われますが、時間の経過とともに尻すぼみになってしまいます。一方、ボトムアップの事業は、徐々に活動が活発になって継続していきます。また、ボトムアップの活動では、ゆるやかなネットワークができていきます。
- コーディネーターは、指名するものではなく、地域全体で育てていくものだと思います。そして、地域と学校とコーディネーターがともに育ち合ってまちづくりにつながっていかないと、地域学校協働本部はうまく機能しないのではないのでしょうか。
- コミュニティ・スクールと地域学校協働本部が、対等な関係で継続した活動をしていくためには、地域側がまちづくりを根本から考えていかないと、地域に根ざした活動にはならないと考えます。

#### (2) 小田原市放課後子ども教室

- 放課後子ども教室のコーディネーターの仕事は、主に活動プログラムの作成や関係機関との連絡・調整です。
- ボランティアを探すのに苦労しています。また、放課後子ども教室と放課後児童クラブとの連携・一体化という課題があります。
- 放課後子ども教室の新規開設にあたっては、学校それぞれの問題意識や地域性を踏まえてフレキシブルに対応し、コンセプトを明確にした上で各学校に合わせた実施方法で運営しています。

- 学習支援を重点的に実施するため、学習アドバイザーには元教員を配置しています。これにより、安心して学習支援を行える環境ができています。
  
- 学習支援については、学校で教えていることと、学校に附属しているところで教えているものとの関係はどうか、学習支援の方法、内容はどこが責任をもつのか、といったところがポイントとなってくると思います。
  
- コーディネーターを学校に所属するものと位置づけるのか、あるいは、地域の立場として位置づけ、コーディネーター同士が連携する中で、学校同士の連携とは違う観点から見ていくのか、というのがポイントになってくるのではないかと思います。
  
- さいたま市では、PTA で活躍した方々を、学校支援のためにつないでいく仕掛けとしてコーディネーターになってもらう取組が行われています。行政がその仕掛けを作っている事例です（ただし、主導しているわけではありません）。この事例では、学習を担うボランティアであっても、一般の方や学生でもよいとし、ただし、退職校長などによるコーディネーターが面接をして適正等を見極め、学校の中で何を担っていただくか振り分けるという仕組みになっています。教育や地域に明るい方々がコーディネーターになり、マッチング等を行う一方、ボランティアは広く求められるようにするという仕組みです。

## ○ 第3回審議会概要

	開催日	平成 29 年 8 月 1 日 (火) 10:00~12:00
第3回 審議会	内 容	<p>○地域と学校の連携・協働に関する取組事例について 委員 2 名より、それぞれ関わりのある事例について報告いただいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・南足柄市「地域学校支援事業」南足柄中学校における取組</li> <li>・藤沢市「学校・家庭・地域連携推進事業（三者連携ふじさわ）」の取組</li> </ul> <p>○今後の審議会の運営について ・事務局より、第 13 期審議会の今後の運営案について、部会を設置しないこと、各委員にレポート作成をお願いすることについて説明し、了解を得た。</p>

以下、○発表者 ●発表者以外の委員

### 【取組事例についての主な発言】

#### (1) 小田原市放課後子ども教室（前回の補足）

○ 学習支援における、学校で教えているものと、附属しているところで教えているものとの関係ですが、これは、教育委員会教育総務課の責任において行われているとのこと。また、コーディネーターの位置づけですが、地域の立場として位置づけられると思われま

#### (2) 南足柄市「地域学校支援事業」南足柄中学校における取組

○ 学校支援ボランティアの導入によって、子どもたちにとっては、多様な体験や経験の機会を増やす、学校にとっては、開かれた学校を実現し活性化につながる、家庭・地域にとっては、生きがいつくりや自己実現が図られる、といった効果があります。

○ 課題として、「学校からの学校支援ボランティア要請が毎年少ない傾向がある」という点があります。これには、2つの要因が考えられます。1点目は、毎年同じボランティアに来ていただく形で定着しているため、新たなボランティアを開拓する必要があまりないこと。2点目は、授業支援ボランティアになかなか入っていただけないことがあります。授業支援ボランティアは、技術科などの専門的な授業に関わってもらうことが多いため、ボランティアを増やすことが難しいのが現状です。一方で、楽しく作業できるものには、ボランティアが多く集まります。ボランティアがやりがいを感じ、やってよかったなと思わないと、継続していくのは難しいと思います。

○ ただし、得意分野を活かしたい方はいるので、それを教員のニーズとマッチングできると授業支援にももっとボランティアに入っていただけるのではないかと思います。

○ ボランティアが成功する要因は2点あると考えています。1点目は、ボランティアがやりがいを感じる。2点目は、ボランティアに入っていただくことが子どもたちのためになった、と教員が感じる。ことだと思

○ 中学校ではコーディネーターが2名体制となっているため引継ぎがスムーズに行われていますが、幼稚園はそこまで体制が整っておらず、引継ぎが課題となっています。

○ 市全体の小学校同士、中学校同士の横の繋がりとなるコーディネーター連絡会への要望があります。

○ この事業は“連携”がなにより重要ですが、コーディネーターのやる気で連携が進みつつあると感じています。

- 南足柄市の事業は、開始時期を見ると、文科省の学校支援地域本部の施策（※）が始まった時期とほぼ重なります。（※平成20年度から実施）

## (2) 藤沢市「学校・家庭・地域連携推進事業（三者連携ふじさわ）」の取組

- 中学校区を中心に市内に15の協力者会議が置かれています。この組織の目的は、地域課題の討議、地域コミュニティ事業、地域団体との連携事業、地域環境整備事業、学校支援事業、講演会・学習会、推進事業の周知などです。各地域で様々な活動が行われており、その中心となって活動している方々がいらっしゃいますが、コーディネーターという呼び方で委嘱するといったことはしていないことが、一つの特徴といえるかも知れません。
- 「三者連携ふじさわ」の事業では、公民館との関わりは、事務局としての関わり以外にはあまり出てこないように思います。ただし、ボランティアを探したいときには、公民館が持っているボランティア名簿を参考にさせてもらうなどのつながりがあります。
- 地域と学校が連携する場合、エリア分けが問題となることがよくあります。藤沢市の場合、協力者会議の区割りは中学校区単位で、事務局が市民センターまたは公民館となっています。行政区と学校区でエリアが異なることによるトラブルなどはないのでしょうか。
- トラブルとまではいかないまでもややこしい問題があります。行政区と学校区が異なる場所に位置する学校では、両方の活動に参加しなくてはならないなどの問題が生じているようです。
- 学園都市むつあいの事例を聞いて、小学生と高校生との関わりがとてもいいな、と思いました。身近な方々から話を聞く、自分に近い世代の人の話を聞く機会があるのは、小学生にとってとても参考になると思います。

### 【全体を通じて】

- （紹介された事例で）公民館がどこにも出てこないのが寂しいと思いました。公民館には社会教育の様々な活動をしている方がいらっしゃり、社会教育関係団体との関わりもあります。地域の拠点となる公民館がコーディネーターの役割をすることもできると思います。様々な人材を持っている公民館を、ぜひもっと活用して欲しいです。
- 現在は、地域やNPO等から様々なプログラムが提供されます。また、子ども達の現在の状況を見ていると、習い事をたくさんしていたり、学校にも大人がたくさん入って学習支援が行われるなど、常に、真夏の太陽の日差しのもとで、どこにも隠れる場所がなく大人の視線に晒されています。それが、逆に疲れる状況を生み出してしまっていることが心配だ、という指摘を聞いたことがあります。何のために学社が連携するのか、子ども達にとってどういう環境がよいのか、ということを考えざるを得ない指摘だったと思います。  
社会教育は、フォーマルではない学びや活動です。すなわち、意図や計画がなく、生活のなかで偶発的に人と出会ったり経験したりして、自ら体験し、自ら考えて、自ら学んでいく営みが多く含まれているものです。子ども達にとっても、地域の方にとっても楽しいのは、偶発性にとんだインフォーマルな活動なのではないでしょうか。そこには、フォーマルな、「教える」というのとは違った関係性があるから楽しいのではないのでしょうか。  
シニア世代と子ども世代の関係性には、「冗談関係」が多く含まれています。つまり猥雑なことや子どもの悪さも冗談として受け流してくれる関係、そういう懐の深い関係、遊びのある関係性があつたほうが、子どもにとっても大人にとっても楽しく、関係が長く続くのではないかと思いました。

## ○ 第4回審議会概要

第4回 審議会	開催日	平成29年11月10日(金) 10:00~12:00
	内容	<p>○地域と学校の連携・協働に関する取組事例について 委員2名より、それぞれ事前に取材した事例について報告いただいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・茅ヶ崎市松林地区まちぢから協議会子ども部会「ふくろう塾」</li> <li>・平塚市 金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会「通学合宿」</li> </ul> <p>○レポートの作成について ・各委員にレポートの作成を依頼した。</p>

以下、○発表者 ●発表者以外の委員

### 【取組事例についての主な発言】

(1) 茅ヶ崎市松林地区まちぢから協議会子ども部会「ふくろう塾」

- 「ふくろう塾」では、学習支援と夕食支援が行われており、大きなねらいは、子どもたちの第3の居場所をつくることにあります。
- 地域の大人たちが子どもたちに積極的かつ組織として関わることによって、地域の教育力が高まっています。また、新たな地域コミュニティの構築という動きとしても捉えられます。
- 規模拡大への要望がありますが、現在の人材では活動の拡大は難しいとのこと。また、学習支援について、指導役となるボランティアの指導方法と事業のねらいとの齟齬なども課題です。
- 学童保育、子ども食堂、協働推進事業（教育委員会とNPOとが協働で行っている学習支援）などの他事業との連携やネットワーク化も今後の課題です。
- 学校が抱える課題の複雑化、困難化が見られるなかで、学校が地域に開いて、地域の力を借りながら、地域と学校の連携・協働によって子どもを育てていくことが必要です。
- 「地域と共にある学校」「学校と共にある地域」ということが重要です。そのためには、組織的、継続的な仕組みづくりが必要です。
- 放課後児童クラブなど、小学校では子どもたちを保護者目線で面倒を見てくれますが、中学校では、急にそういう体制がなくなってしまう。そこで、中学校版放課後児童クラブのようなものができないか、という意見がありました。「ふくろう塾」の学習支援は参考になりました。

(2) 平塚市 金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会「通学合宿」

- 「通学合宿」の目的は、子どもの社会性、自主性、協調性を伸ばし、生きる力や思いやりの心を育てることにあります。また、この活動は、子どもにとっても、それを担う大人たちにとっても、フォーマルではない学びの活動といえるものでした。
- 「通学合宿」の本来の目的（生きる力を養う、自立心を育て家族の大切さに気づく、地域の方々との結びつきを強める、地域の方々の青少年育成の関心を高める）に加えて、目的以上の副産物（感動と感謝、達成感、承認欲求、繋がり、当たり前からありがとう）が、子どもだけでなく、関わった大人たちの中にも生み出されていました。
- 連携・協働を進める上では、リーダーシップをとれる人が絶対的に必要です。リーダーシップは、才能ではなく、人として魅力を高める“真摯さ”ではないかと思います。
- 生涯学習の中で、真摯さを学ぶ成人教育の機会を作り、リーダーシップを発揮できる人材を育成することも必要ではないでしょうか。

●教員はどのように関わっていますか。学校としては、多忙化しているとはいえ、地域に任せっぱなしという訳にはいかないと感じています。

○学校の先生が宿泊場所にいると、学校と変わらなくなってしまうので、付かず離れずの距離感を保っているようです。

●PTAは関わっていますか。

○運営に関わっています。ただし、合宿中は親の顔を見ないことが基本となっているため、食事の準備などは、PTAではなく地域の団体が行っています。

●秦野市の通学合宿では、PTAが夕飯作りの手伝いをしており、子どもは参加していないのに、親は参加しなくてはならないといった状況があつて違和感を持っていました。平塚市の事例は参考になりました。

●合宿に行っている子と行っていない子の温度差が気になりました。なるべく多くの子どもたちが参加できる体制ができるといいと思います。

## 【2事例共通の質問】

●参加は希望制でしょうか。どのような形で応募して決まるのでしょうか。

○「ふくろう塾」は、生徒の自主性、主体性を尊重しています。広報は、学校と連携して行っていますが、口コミもあります。

○「通学合宿」は、学校から家庭に案内を配付します。人数に上限があるので抽選を行います。

## 【全体を通じて】

●両事例とも、公民館は“場所の提供”となっていました。公民館は地域の人々の活動の拠点になっているはずなのに、その公民館を飛び越えて、地域と学校の連携と言っているのが不思議な感じがしました。

●公民館も入って進めていくのが、学校と地域の連携だと思います。学校と地域団体だけではなく、さまざまな人材や機能を抱えている公民館を含めた連携ができるとよいと思います。

●厚木市の通学合宿は、公民館の全面的なバックアップがないと実施できません。公民館の社会教育主事が地域の活動を全面的に支えてくれることで、地域が成長できます。

○公民館には、地域の課題を明確に捉えて、活動につなげていくという役割もあると思います。

●公民館が機能して、子どもと大人が触れ合う場所や、指導、体験、家庭では学べないことを発見する機会が提供されることはよいことだと思います。ただし、地域によって方法は異なります。さまざまな人や団体に関わって、その地域でのやり方が模索できていくのではないかと思います。

●子どもたちの居場所について、学校の評価とは全く違う切り離された世界に自分の居場所があるから、安心感をもってつながることができるのだと思います。学校と地域の連携する場合、地域の人たちによって形づくられているものが主流となって、そこに、子どもと、先生ではない地域の人たちとの信頼関係のなかで居場所ができていく、ということが理想なのではないでしょうか。連携を考えると、学校の関わり方はどのくらいがよいのかがポイントになると考えます。

●中高生の場合、親や先生と少し距離をとったところでの第3の場所が大切になってきます。京都ユースセンターの場合、学校の先生たちは、外からは見るが中には入らない、センターからも学校の側には報告しないという距離感を持っています。先生たちにとっては、学校だけではケアしきれない子どもたちを、そういう場所で別の大人が見てくれるのはありがたいという信頼関係、住み分けができています。学校が抱えすぎてしまうことはよくないと思います。教師と生徒ではない関係性が必要となります。地域の多様な他者、多様な縦、横、斜めの関係性が豊かにある場が重要です。学校がどれだけ地域を信頼して委ねることができるか、手を離す勇気がとても大事だと思います。